

ヴォルペ (Ms/エドヴィージェ)、マイケル・スパイアーズ (T/アルノール)、アンドリュー・フォスター=ウィリアムズ (Br/ギョーム・テル)、ラッファエーレ・ファッチョラ (B/ゲスレル) ほか
収録：2013年7月ヴィルトパート Bongiovanni AB20029 (ライブ。DVD2枚組)

ヴィルトパートのロッシェニ音楽祭《ギョーム・テル》のライブCDについては、4月5日配信のガゼッタ第95号で紹介しましたが、その上演映像のDVDが発売されました。ドイツのローカル音楽祭ゆえ、演出も舞台もショボイだろうと予想していましたが、ある意味それが当たりました。衣装は安売りショップで揃えたみたい、椅子もプラスチックのガーデンチェアとあって、低予算丸出しのヨッヘン・シェーンレバー演出です。

でも、映像を見ないとどんな舞台だったのか判りません。ネタバレになるので簡単にはふれませんが、義務と愛の相克に苦しむアルノールの複雑な心情が第2幕の末尾、愛国者たちの盟約シーンの後の芝居で示されます。第3幕で民衆に課される服従がゲスレルの便器の排泄物への拝跪、第4幕嵐のシーンに映画「戦艦ポチョムキン」が映写されるなど、そこそこ意外性のある演出でした。

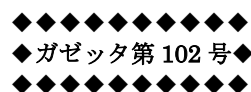
CDでイマイチに思えた歌手たちも、演技と表情のおかげで好印象に変わりました…ジュミ役は駄目なままですが…。マティルド役ハワースとアルノール役スパイアーズだけでなく、テル役フォスター=ウィリアムズとエドヴィージェ役ヴォルペに対する筆者の評価も、ぐっと上がりました。こういうのは見なきゃ話になりませんので、関心のある方は…但し、ROFとの甚だしい落差を承知の上で…ご覧ください。AMAZONがいち早く入荷済みで、価格も一番安いです。



▼7月のスカラ座《オテッロ》の指揮者変更！▼

オマケで直近の指揮者変更のお知らせです。7月にミラーノのスカラ座が上演するロッシェニ《オテッロ》の指揮者が、当初予定のジョン・エリオット・ガーディナーからムハイ・タンに変更されました（歌手は変更なし）。ムハイ・タンは、バルトリ主演のチューリヒ歌劇場《オリー伯爵》と《オテッロ》の指揮者としてお馴染みのことと思います。その昔《オリー伯爵》を振ったとはいえ、ガーディナーはロッシェニ指揮者ではありませんので、この変更は個人的には大歓迎です。筆者は7月7日に観劇予定。その感想は7月15日配信予定のメルマガ第105号に書かせていただきます。

(2015年6月5日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第102号◆

ガゼッタ第102号をお届けします。

本号は、「ゼツダ先生の来日と岡山廣幸さんのお別れ会」、「パッティとロッシェニ（連載：変人ロッシェニ [第1回]）」をお届けします。

次回例会（7月20日。2015年ROF予習会）のご案内はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼ゼツダ先生の来日と岡山廣幸さんのお別れ会▼

昨日（6月14日）午後、昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・ショウワにて、藤原歌劇団の前・総監督、岡山廣幸さんのお別れの会がしめやかに行われました。筆者は面識がある程度のお付き合いですが、参列して岡山さんの足跡と功績にふれ、感慨ひとしおでした。

この日は10日に来日されたアルベルト・ゼツダ先生の指揮で、ロッシェニ《小莊厳ミサ曲》の「キリエ」「クム・サンクト」「アニユス・デイ」、《ランスへの旅》14重唱（ピアノ伴奏）のほか、岡山さん作曲の歌曲も披露され、藤原歌劇団の団員に愛されたお人柄にふれることができました。ゼツダ先生のお元気な姿にも一安心。来月の藤原歌劇団《ランスへの旅》、筆者は海外ツアーで見られませんが、観劇された読者のご感想を投稿いただければ幸いです。

▼パッティとロッシェニ（連載：変人ロッシェニ [第1回]）▼

ゼツダ先生指揮の新譜《泥棒かささぎ》（NAXOS 海外盤 CD3 枚組）も手元にありますが、まだ聴いていません。その紹介は次号にゆずり、本号から短い文章でロッシェニに関する連載を始めます。ロッシェニ作品については数多く書かれていますが、性格や人間性に関する文章は少なく、資料に基づいてこれを検証するのも研究者の責務です。その第1回として、ロッシェニの前で〈今の歌声〉を歌い、「それは誰の作曲かね？」と皮肉を言われたパッティの逸話を取り上げたいと思います。

◎アデリーナ・パッティとロッシェニ

1843年2月19日マドリッドに生まれたアデリーナ・パッティ (Adelina Patti, 1843-1919) は、8歳にしてニューヨークで演奏会デビューして脚光を浴び、アメリカ全土で15歳までコンサート・ツアーを行い、「小さなジェニー・リンド」と呼ばれました。オペラ・デビューを1859年11月24日、ニューヨーク音楽アカデミーの《ランメルモールのルチア》で飾り(なんと16歳!)、2か月後にはボストンの劇場でロジーナを初役しています。1861年、18歳でロンドンのコヴェント・ガーデン劇場とベルリン宮廷劇場にデビューし、翌1862年11月16日、パリのイタリア劇場に《夢遊病の女》アミーナでデビューして大成功を収め、続く2か月間に演じたルチア、ロジーナ、ノリーナ、ゼルリーナにより、その人気を不動のものとなりました。

パッティがロッシェニの夜会に出席したのはこのパリ・デビューのシーズンが最初で、〈今の歌声〉を聴いたロッシェニが気分を害し、「いま聴かせてくれたアリアは誰の曲？」と皮肉を込めて尋ねた話は、皆さんご存知でしょう。でも筆者の関心は、その後どうなったのかという点にあります。それを教えてくれるのが、夜会の3日後にロッシェニを訪ねたサン＝サーンスの次の証言です。

……彼 [ロッシェニ] はまだ落ち着きを取り戻していなかった—「私は自分のアリアが装飾的でなければならぬことを良く判っている。そのために作られているからだ。けれどもレチタティーヴォに至るまで、私が書いた音は一つも残っていなかった。本当に、あまりに過剰だ! …」。そして [ロッシェニ] は苛立ちながら、ソプラノ歌手がコントラルトのために書かれたこのアリアを歌うことに固執し、彼がソプラノのために書いた曲を誰も歌おうとしないことに不平を述べた。

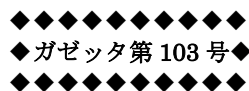
……ディーヴァ [パッティ] は、彼のそばでひどく苛ついていた。けれどもロッシェニを敵に回すのは重大問題と反省し、数日後、彼女は後悔しながらやって来て彼 [ロッシェニ] に助言を求め、彼はそれをしてあげた。そのおかげで、完全でなかった彼女の才能が華麗で魅力的なものになったのである。この出来事の2か月後、ラ・パッティは師 [ロッシェニ] の伴奏で《泥棒かささぎ》と《セミラーミデ》のアリアを、その後彼女が常に見せた明るい声質と完全な正確さを結び付けて歌った。

実はこれ、サン＝サーンスが半世紀後の1913年に出版した本に書かれた話なのです。でも、若き日のサン＝サーンスが晩年のロッシェニと親しく接したことから、筆者は前記の内容を事実と信じます。

これとは別に、そのときロッシェニが言ったとされる意地悪なダジャレも後世に伝えられています。パッティはマネージャーに姉アマリアの夫でピアニストのモーリス・ストラコシュ (Maurice Strakosch) を伴っており、ロッシェニはパッティの悪趣味な装飾をストラコシュの仕業と考え、その名前をもじって「extra-cochonnée (エクストラ=コショネ [ひどい汚物])」と言ったとパッティ伝に書かれています。これとは別に、ロッシェニが「それはStrakoschonnerieだよ」と言ったとする説もあります (これもストラコシュと cochonnerie [汚物] の合成語)。

確かな典拠は不明ですが、ロッシェニはどちらも言った可能性があります。なぜなら彼は、毒を含んだ警句やダジャレの達人だったからです。そしてロッシェニが口にした言葉がたちまちパリ中に流布したことを考えれば、活字の形で広まった警句やダジャレの出元がロッシェニ自身の可能性も大いにあります。この連載では、そうした警句やダジャレを通じて、自虐的で風変わりなロッシェニの性格を明らかにしてみたいと思います。個々の発言の典拠は、後日まとまった形で発表する論考やロッシェニ伝で明らかにさせていただきます。

(2015年6月15日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第103号◆

ガゼッタ第103号をお届けします。

本号は、「新譜：ゼツダ指揮《泥棒かささぎ》発売!」、「ロッシェニの自虐的性格 (連載：変人ロッシェニ、第2回)」をお届けします。

次回例会 (7月20日、2015年ROF予習会) のご案内はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼新譜：ゼツダ指揮《泥棒かささぎ》発売!▼

◎ロッシェニ《泥棒かささぎ》2009年7月ヴィルトバートのロッシェニ音楽祭上演ライブ

アルベルト・ゼツダ指揮ヴィルトウオージ・ブルネンシス、クラシカ室内合唱団、マリア・ホセ・モレーノ (S/ニネッタ)、マリアーナ・レヴェルススキ (Ms/ビッポ)、ルイザ・イスラム＝アリ・ツァーデ (Ms/ルチア)、ケネス・ターヴァー (T/ジャンネット)、ステファン・チフォレッリ (T/イザッコ)、ブルーノ・ブラティコ (B/フェルナンド・ヴィッアヴェッラ)、ロレンツォ・レガッツォ (B/ゴットバルド)、ジューリオ・マストロトタロ (B/ファブリーツィオ・ヴィングラディート) 他 Naxos 8.660369-71 (CD3枚組)



《泥棒かささぎ》はロッシェニ全集版の最初に出版された巻で、ゼツダ先生が校訂しました。なのにゼツダ指揮の正規録音は1979年のスタジオ録音のみ (CDは旧Cetra、現Warner)。さみしいなと思っていたところに現れたの

本号は、「ROF 第3回《ランスへの旅》プログラム表紙デザイン・コンクールの結果発表!」、「7月のオペラ・ツアーとスカラ座《オテッロ》の報告」、「クララ・シューマンを不愉快にしたロッシェニ（連載：人間ロッシェニ、第4回）」をお届けします。分量の関係で2回に分けての配信です。

次回例会（7月20日。2015年ROF予習会）のご案内はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼ROF 第3回《ランスへの旅》プログラム表紙デザイン・コンクールの結果発表! ▼

当メルマガ「ガゼッタ」第92号（3月5日配信）でお知らせした「ROF 第3回《ランスへの旅》プログラム表紙デザイン・コンクール」（III edizione del Concorso Il tuo Viaggio）、その結果が6月26日にROFサイトで発表されました。受賞作はマリア・テレザ・カルレッティ（Maria Teresa Carletti）によるデザイン。

題名と、のっぺらぼうのような5人の型を配しただけのシンプルな構成で、場所や人物のアイデンティティを削ぎ落としてオペラ史における《ランスへの旅》の独自性を抽象的に表現した点が評価されたようです。これなら私にも描けたのに…なんて思っても、後の祭りですね（笑）。

《ランスへの旅》プログラム表紙デザインの結果発表はこちら（英語版とイタリア語版）↓

<http://www.rossinioperafestival.it/?lang=eng&IDC=506&ID=654>

<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=506&ID=654>

受賞作はこちら（PDF版）→<http://www.rossinioperafestival.it/intra/upload/news/file/MariaTeresaCarletti.pdf>

▼7月のオペラ・ツアーとスカラ座《オテッロ》の報告▼

筆者の同行するツアー「チューリヒ・オペラフェスティバル&イタリア名門歌劇場めぐり9日間」（郵船トラベル、7月3～11日）から無事帰国しました。観劇したのはチューリヒ歌劇場《ローエン格林》（7月4日）、《愛の妙薬》と《カプレーティとモンテッキ》（5日の午後と夜）、ミラーノ・スカラ座《オテッロ》（7日）、トリノ王立歌劇場《ラ・ボエーム》（9日）の五つ。以下、簡単に報告します。

成田を7月3日に発ち、その日のうちにチューリヒ到着。暑いなの…なにしろ夜になっても気温35度なんです。以後連日35～38度の異常猛暑、いや酷暑の毎日で、体感的には40度という感じ。パリでは7月1日に39度を超え、ほどなくドイツの一部でも観測史上最も暑い40度超を記録。筆者はヨーロッパで5万人以上が亡くなった2003年8月にイタリアにいましたが、それに匹敵する暑さです。

◎《ローエン格林》（4日）

そんななか、最初に観劇したチューリヒ歌劇場《ローエン格林》は、2012年に同歌劇場の総裁に就任したアンドレアス・ホモキによる演出。昨年4月のウィーン国立歌劇場プレミエに続いて9月にチューリヒのプレミエを迎えました（共同制作）。ローエン格林役のクラウス・フロリアン・フォークトが足を負傷し、左膝にギブスをはめての出演です。歩き方もごちなく、重心がずれ、腰に負担がかかるなどの問題をカヴァーしながらも、持ち前の甘美な声で見事な演唱を繰り広げました。

エルザ役のエルザ・ヴァン・デン・ヘーヴァー [ヒーヴァー] は、2013年メトロポリタン歌劇場《マリア・ストゥアルダ》の映像を通じて評価していましたが、期待にたがわぬドラマティックな発声歌唱で聴き応え充分。オルトルート役のペトラ・ラング、テルラムント役のマーティン・ガントナーの好演も相俟って質の高い上演です。問題は女性指揮者シモーネ・ヤング。2005～15年ハンブルク歌劇場の総支配人と音楽監督を兼務し、チューリヒでも人気が高かったのですが、前奏曲から音が大きく、「弱音じゃ無いんかい！」と突っ込みたくなるほど。オーケストラをガンガン鳴らし、迫力ある音響に圧倒されましたが、もっと繊細な表現があってもいいのでは？

◎《愛の妙薬》（5日・午後）

翌5日の《愛の妙薬》は、アディーナ役ディアーナ・ダムラウの降板を告知されて慌てましたが、代役のエレオノーラ・ブラット（Eleonora Buratto）が大変見事でした。1982年生まれだから今年33歳。名前に見覚えがあるので調べたら、2007年にスポレートの声楽コンクールで優勝し、スカラ座で研修してムーティに評価され、2007年ザルツブルク聖霊降臨祭のヨンメッリ《デモフォオンテ》に抜擢されました。以後ムーティの棒で活躍し、2014年ローマ歌劇場来日公演《シモン・ボッカネグラ》で降板したフリットリの代わりにアメリカを歌ったと言えは思い出した方も多いでしょう。この日も広い音域に卓抜なアジリタを駆使し、なかなかの逸材と感心しました。

ネモリーノ役のパヴォル・ブレスリク（1979年スロヴァキア生まれ）、ベルコーレ役のマッシモ・カヴァッレッティ、ドゥルカマラー役のルーチョ・ガッロも好演。グリシャ・アサガロフ演出の舞台はパステル調のカラフルな色彩で、左右にスライドする古典的な書割も使われます。ちなみに筆者は2010年11月にフローレス主演で同じ舞台を観劇し、そのときは指揮者ネッロ・サンティの旧弊な音楽作りに呆れました。今回は昨年ROFの《セビリアの理髪師》を指揮したジャコモ・サグリパンティとあって注目しましたが、チューリヒの二軍とおぼしき管弦楽団がダレた演奏をしました。ヒョロツとした今どきの若者とあって、オケが指揮者をなめたのでしょうか。

◎《カプレーティとモンテッキ》（5日・夜）

早めの夕食をとり、夜の《カプレーティとモンテッキ》を観劇。前日から会場でお会いした会員・角岡さんが、「初日を見たらジュリエッタ役のオルガ・クルチンスカ（Olga Kulchynska）が素晴らしく、もう一回見ることにした」と聞いていました。名前には聞き覚えがなく当然。1990年ウクライナのリウネに生まれ、キエフの音楽院で

声楽を学んで 2011 年からさまざまな国際声楽コンクールで賞を受けてポリショイ劇場の研修所で研鑽を積み、2014 年にデビューしたピカピカの新人です。今年 25 歳。そしてこれがロシア以外での本格デビューなのですが、ネトレプコのデビューしたての頃のように瑞々しく、輝いています。第二のネトレプコ発見！といった印象です。

ローマオ役のジョイス・ディドナートは、2013 年 5 月のロイヤル・オペラ《湖の女》のときもそうでしたが、ヴィブラート過多の発声でいまひとつ。表情と演技はいいけれど、声と歌唱で新人クルチンスカに負けた感じがします。テバルド役のテノール、バンジャマン・ベルネーム (Benjamin Bernheim) も若き逸材で好印象。指揮がチューリヒ歌劇場の音楽監督ファビオ・ルイーギとあって、オーケストラも前の二つとは打って変わって引き締まった演奏を繰り広げました。

演出はクリストフ・ロイ。舞台をぐるぐる回転させて幾つもの部屋を見せ、対立する党派抗争の犠牲者らしき死体がそこかしこに転がり、ジュリエッタの子供時代とおぼしき少女も登場します。この上演では歌と音楽に集中するため演出に頭を巡らせず、「舞台を回しすぎるなあ」「ずっと横たわっている死体役の助演も大変だけど、人形でないからリアリティあるな」…なんて思いながら見ていました。

翌 6 日は移動日で、専用バスでコモ湖畔のモルトラージオ (Moltrasio) に宿泊。船着き場からホテルに向かう道に、ベッリーニのモニュメントがありました。そう言えば、ベッリーニはコモ湖畔のジュディッタ・パスタの別荘で《ノルマ》を作曲したのですね。前夜《カプレーティとモンテッキ》を観劇したばかりですから、すごい偶然です。

筆者撮影のモニュメントの写真→



続きは同時に配信した「ガゼッタ第 105 号の続き」をご覧ください。

ガゼッタ第 105 号の続きです。

◎《オテッロ》(7日)

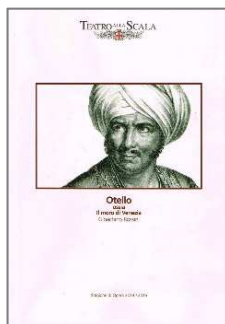
コモ河畔から移ったミラーノも、暑い暑い。38 度はあるんじゃないかしら…へトへトになりながらもとりあえず Ricordi で買い物を、と思ってガッレリアアのアーケードに行くと、プラダとフェルトリネッリの看板を掲げて閉まっています…リコルディが無くなった？…移転か？…どこに？…聞いてないゾ！…クソ暑い中ガッレリアアを探しても無いものは無い…ならば Messaggerie Musicali に行こうと思って歩いて行くと、こちらも店が無い！…メッサジエーリエ・ムジカーリが潰れた？…

ディスクも楽譜も通販で買えるから、大きな店舗を維持するのも大変でしょう…そういえば、筆者もネットでばかり物を買っているなあ、と反省しきり。便利だけど、つまらない時代になりましたね。

それはともあれ、スカラ座の《オテッロ》ですが、こちらもある意味「予想外」でした。ユルゲン・フリムの演出が視覚的につまらないのです。背後と両サイドを巨大なカーテンで囲い、第 1 幕は舞台中央に宴会のテーブルセット、右手に大きな椅子があるだけ。第 2 幕は安っぽいガーデンチェアをたくさん置いただけ…他にもちょこちょこ物はあるけれど、煎じ詰めればそれだけ。第 3 幕は殺風景な舞台にヴェネツィアの黒いゴンドラが出てきて、「柳の歌」ではハーブ奏者を乗せた台が人に押されて舞台を横切ります。デズデーモナがゴンドラの上で刺殺されると背後のカーテンが消え、資材の置かれた舞台裏が丸見えになる…だから何だよ、劇とぜんぜん関係ないじゃん。ただの手抜き、経費削減か！？

久しぶりのスカラ座。「あれ、こんなに音響が悪かったっけ？」と不思議なほど音が飛んできません。舞台を囲むカーテンが消音してるみたい…筆者は 3 階パルコの 1 列目ですが、平土間の人たちもみな音が小さいと不満げです。歌手はオテッロ役のグレゴリー・クンデが力強い発声と迫力で突出し、ロドリゴ役のフアン・ディエゴ・フローレスを圧倒しました。でも二人とも記譜されたハイ d を歌わず、肩すかしを食らった感じ。イアーゴ役のエドガルド・ロチャも健闘しましたが、劇場の音響の問題でガツンと聞こえません。デズデーモナ役のオルガ・ペレチャツコは発声が固く、歌に伸びやかさを欠き、カーテンコールに「ブー！」が飛びました。

指揮者は当初予定のジョン・エリオット・ガーディナーから DVD 化された 2012 年チューリヒ歌劇場プロダクションの中国人ムハイ・タン (Muhai Tang) に代わり、それはそれで期待したのですが、テンポがやけに遅くて旋律が間延びし、歌手たちも歌い難そう。かと思えば、後奏だけやけに速くして音楽のフォルムを損ねています。クンデやフローレスの方がロッシーニの音楽とテンポを良く判っているのに！



《オテッロ》プログラムの表紙と当日の配役表



昨年観劇したザルツブルク上演のアンサンブル・マテウスも伴奏に精彩を欠きましたが、スカラ座の場合は指揮者タンのせいで音楽の乗りが悪いみたい。ちなみにスカラ座におけるロッシーニ《オテッロ》の上演は145年ぶりであって鳴り物入りの上演だったのですが、いい歌手を揃えても演出と指揮者がこれではいいとこなしです。

あ、書き忘れましたが、この演出にはいろいろ不可解な点がありました。黒板に書かれたアラビア文字にイタリア語で「不貞 (infida)」「嫉妬 (gelosia)」などと書き足すのですが、誰が誰に、どちらの言語を教えているのかイマイチ判りません。最終場も意味不明。イアーゴが平土間の背後から現れてピットに向かって歩み、なにか歌うと背後から歩いてきたデズデーモナの分身のような女性 (助演) と抱き合います。イアーゴは死んで最終場に登場せず、歌うパートも無いのに何やねん、と目と耳を疑いました。ルーチョの一節を歌ったのかどうか、一瞬の出来事なので判然としません。でも勝手に変えるのは反則！ この上演でイアーゴがどこを歌ったのかご存知の方は、ご教示ください。

《オテッロ》の舞台写真は、スカラ座のサイトをご覧ください↓

<http://www.teatroallascala.org/it/stagione/2014-2015/opera/otello.html>

◎《ラ・ボエーム》(9日)

翌8日はトリノーノに移動して観光と宿泊。9日はバローロの里を観光してワイナリーで試飲し、夜にトリノーノ王立劇場で《ラ・ボエーム》を観劇しました。席は平土間中央ブロック8列目で音響も良く、アンドレア・バッティストーニの指揮ぶりも良く見えました。ミミは当初予定のジャンナッタージオからバルバラ・フリットリに変更され、最初の2幕はやや声の衰えを感じましたが、第3幕のソロからヴェテランの上手さを発揮して第4幕の終盤も説得力がありました。ムゼッタは、当初予定のガンベローニから代わった今年28歳のマリーア・テレーザ・レーヴァが運葉なキャラクターで好演。ムゼッタに続いてクレモーナでミミを歌うソプラノです。

ロドルフォ役のステファノ・セッコ、マルチェッロ役のマルクス・ヴェルヴァら4人の男声陣も秀逸で、アンサンブル・オペラとしても充実。演出は同歌劇場専属らしきヴィットーリオ・ボッレリによるもので、他の写実的な演出…例えばゼッフィレリ…をアレンジし、突出した個性に欠けるものの視覚的な不満はなく、隅々まで透徹したバッティストーニの棒も相俟って大満足でした。終わり良ければすべて良し…ツアーの最終日をトリノーノの《ラ・ボエーム》にしたのは、その意味で正解でした。

以上、三都市三劇場で観劇した5演目について簡単に記しました。突然の異常猛暑で体調がおかしくなるのは歌手も同じ。あの暑さの中でよくぞここまで歌い演じたものだ、というのが正直な感想です。実はトリノーノにもう一日あればシラグーザとキアラ・アマル主演《セビーリヤの理髪師》の初日を観られたのですが、日本ロッシーニ協会会員5人と筆者を含む20人のツアーで自分だけ残って《セビーリヤの理髪師》を見るのはいかがなものか、と考へ断念しました。来月にはROFもあることだし…幸い「ペーザロ・ロッシーニ音楽祭&ザルツブルク音楽祭9日間」(8月17~25日)も催行が決まり、一安心。まだ受付中です。この機会にご一緒しましょう。

「ロッシーニ音楽祭&ザルツブルク音楽祭9日間」の詳細はこちら。↓

http://www.ytk.co.jp/music/kaigai_opera_classic/tour/

▼クララ・シューマンを不愉快にしたロッシーニ (連載：人間ロッシーニ、第4回) ▼

ロベルト・シューマンの妻クララ (Clara Josephine Wieck-Schumann, 1819-96) が天才少女ピアニストとして活躍し、夫ロベルトの死後もヨーロッパ各地で演奏活動を行ったことは皆さんご存知のことと思います。そのクララ・シューマンがロッシーニと面識を得たのは1862年3月、彼女が42歳のときでした。でもクララには、ロッシーニが少々失礼な男に思えたようです。その経緯は、クララの記事に次のように書かれています (以下、英語訳より重訳)。

3月18日。ロッシーニから呼び出しがあった。彼は育ちの良い男でとても親切だった。音楽院で演奏するための招待。ここではそれが大変な名誉とされている。

3月25日。[中略]とても不愉快だった。他にも呼ばれた人たちがいて、私たちはとても高い椅子に座り、たくさんの丸テーブルに囲まれていた。ロッシーニはポケットから何度もかき煙草の菱形の箱を取り出し、自分でさんざん楽しむと、時々その箱を私の手の中に押し込んだ……。とはいえ彼はとても面白い人で、他の点ではかなり世慣れていて、彼の妻は雌狐のように見えた。

この話、少し説明が必要かもしれません。当時ロッシーニはパリ音楽院の演奏会の手配を任されており、演奏旅行でパリに滞在するクララ・シューマンに目を留め、出演を求めたのです。その話で呼ばれたクララはロッシーニに好感を持ちましたが、1週間後、自分だけが演奏すると思って音楽院に行くと、他の出演者と共に見世物的な扱いをされたうえにロッシーニからしつこくかき煙草を勧められて迷惑したのでした。でも、不愉快な思いをしたにもかかわらず70歳のロッシーニを「とても面白い人」「世慣れた人」と書いていますので、そこだけは評価したようですね。

本日はこれにて失礼いたします…ああ、日本も暑い暑い！

(2015年7月15日 水谷彰良)